

氏名	村田 尚子
学位の種類	修士(看護学)
学位記番号	修士第162号
学位授与年月日	平成25年3月7日
学位論文題目	在宅で看取りをした家族へのグリーフケアが訪問看護師の精神面に与える影響 ー療養生活開始期から看取り後までー

論文内容要旨

※整理番号	167	(ふりがな) 氏名	むらた なおこ 村田 尚子
修士論文題目	在宅で看取りをした家族へのグリーフケアが訪問看護師の精神面に与える影響 — 療養生活開始から看取り後まで—		
<p>1. 研究の目的 在宅で看取りをした家族へのグリーフケアが訪問看護師の精神面に与える影響を明らかにする。</p> <p>2. 研究方法</p> <p>1)研究デザイン：質的帰納的研究</p> <p>2)調査方法</p> <p>(1)研究対象者：A 県内の訪問看護ステーションに勤務する在宅で看取りをした家族に対してグリーフケアを行った経験のある訪問看護師 10 名</p> <p>(2)データ収集期間：滋賀医科大学倫理委員会承認後の平成 24 年 7 月から 9 月</p> <p>(3)データ収集方法：半構成面接を用いた。面接内容は、在宅で看取りをした事例の支援を経時的に振り返りながら、グリーフケアを行うことで感じた心情を聞き取り、語りを逐語録にした。</p> <p>3)分析方法：質的帰納的方法を用いて、『療養生活開始期から終末期』、『臨終期』、『看取りから遺族訪問まで』、『遺族訪問の場面』、『一連のケアを通して』の 5 つの時期において分析した。</p> <p>逐語録を 1 つのコードに 1 つの意味内容が含むようにコード化し、研究目的に照らし合わせながら共通性により分類し、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。カテゴリー間の関連を分析して理論を構築した。信頼性、妥当性の担保においては、適宜メンバーチェックを行い、分析過程において指導教員からスーパーバイズを受けた。</p> <p>倫理的配慮については、プライバシーの保護に十分配慮し、研究協力は自由意志であり、いつでも拒否できることを説明し、同意を得た。滋賀医科大学倫理審査会より承認を得た（承認番号 24-42）</p> <p>3. 結果：338 のコードより 17 のカテゴリー、44 のサブカテゴリーを抽出した。</p> <p>療養生活開始から終末期において、訪問看護師は、患者、家族の望む在宅での看取りの実現を目指し、介護する【家族の安寧を探求】するために、【本音を探る苦悩】を繰り返し、【理想の看取りの縛られ感】を感じながら支援をしていた。入院となった時は【叶わない看取りの虚しさ】を抱いていた。そんな精神面の揺れを【重圧感を支える暗黙知】で支えていた。そして、臨終期においては、【終焉への心の至り】や【事切れ後の安らぎ】を感じながらも、【看取りへの納得と後悔】を抱いていた。その後、日常業務に追われながらも、訪問看護師は、【患者の喪失からくる精神的動揺】を感じながら、残された家族に対して【家族への囚われ感】を感じ、そこから【振り返りがもたらす満足と後悔】の思いを再認識していた。そして、遺族訪問では、【死の喪失感の再燃】や【遺族の評価がもたらす心の揺れ】することで、【効果的遺族訪問の模索】につなげていた。そして、一連の心情から訪問看護師は、【看護師の悲嘆ケアの探求】に気づき、【看取りからの学びを銘記】することで、【在宅看取りと看護師の成長】に繋げていた。</p> <p>4. 考察および総括</p> <p>訪問看護師は、家族へのグリーフケアをしながら、看取りに対する充実感や患者の死への悲嘆、自分の看護過程の振り返りからの自責の念などの感情を感じ取っていた。療養開始期では、グリーフケアをすることに重圧感を感じながらも理想の看取りを追い求めており、臨終期では看取りに対する納得と後悔の思いに揺れ動いていた。看取った後も、遺族を想いながら自分の看護過程を振り返り、満足感と後悔の念を抱き、遺族訪問では遺族の看取り後の暮らしぶりを知りや訪問看護への評価を聞くことで心を揺らがしていた。どの場面においても訪問看護師は、充実感や満足感と重圧感や束縛感、後悔の念に揺れ動き、葛藤していると考えられた。訪問看護師は、その心の揺れから自分自身の精神的なケアの重要性に気づき、在宅で看取ることの経験として成長していることが示唆された。</p>			

備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200 字程度)

2. ※印の欄には記入しないこと。